お経のことば

「わたしには子がある。わたしには財がある」と思って、愚かな者は悩む。
しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。
どうして財が自分のものであろうか。
もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。

思うに執着とは、最も厄介な煩悩です。物への執着は言わずもがな、愛する人に囚われることは、愛情の裏返しではありますが、時に一方通行が過ぎると、最悪その関係がこじれきってしまうこともあります。実際、私の師匠も「人間行（じんかんぎょう）こそが最も困難な修行です。」と常々仰っていました。

上に示したお経は、法句経の名で知られるダンマパダ第５章の６２節と６３節です。このお経は日本の僧侶が法事などの場で唱えるお経ではありませんが、お釈迦様が入滅されて数百年の間にまとめられた、いわゆる原始経典の一部です。そのためお釈迦様の肉声にかなり近い内容であると言われています。この二つの節には、溢れかえった物質に埋没する我々現代人が、日ごろ囚われがちな自己に関しての鋭い考察が含まれています。

読まれると大抵の方が『自己が自分のものではない』という部分につまずかれるようです。勿論私もそうですが、当たりに前に、人はそれぞれ自己があると思っています。しかし、お釈迦様の仰るこの自己とは実は『心』のことなのです。結論から言うと『心の中に自分がある』というのが仏教の基本的な思想です。心とは皆さんが胸に手を当てて思うところのまさにその心です。普通誰もが自分の中に心があると思っていますが、仏教ではその逆なのです。

仮に想像してみてほしいのですが、「今日一日起きてから寝るまで常に良い気分でいよう！」と心に決めるとして、果たして何人の人にそれが可能でしょうか。つまり我々の心は自分の意志ではどうにもできない周りの世界に、皮膚よりも敏感に接しているのです。もっと正確にいえば繋がっているのです。

その証拠に、良いこと悪ことに応じて、心は嬉しくなり悲しくなります。そういうわけでお釈迦様は、確かな心という言い方をされません、しかし、何かしらの『善なる確かな意志』については大いにこれを褒め称えています。穏やかな日も嵐の日もあって悩んで当たり前、しかし意志までもがその心に流されてはいけないよ、ということです。

人や物に対しての執着はあれこれと移ろうものだけれど、そのことを素直に受け止めて、確かな意志をもち、ひとつ高い視点から愚者である自己を見つめる・・・。それができる人こそが賢者である。そんな謙虚な姿勢を大事にしたいものです

- **９月２３日水曜日　秋の彼岸会（ヒガンエ）と千体流し供養**
  午後3時から本堂にて
- **秋頃（詳細未定）　山中ヨーガ**
  大瀧山の頂上にて、自然の中でヨーガをします。
- **毎月２８日　柱源護摩供（ハシラモトゴマク）**
  本堂の護摩壇で炎を上げて祈祷と供養をしています。
  午前9時と午後3時の2回です。
  ※葬儀が重なると変更される場合があります。ご了承下さい。

護国寺
７８１－２１５５
高知県高岡郡日高村九頭２９１
☎　０８８９－２４－７２４

仏事に関してのお悩み、ご質問、行事に関するお問い合わせ等、お気軽にお電話ください。